

## 国際的な資質を育成する社会科学習（4）

— 様々な情報を有効に活用し社会に参画する力を育成するカリキュラム開発を通して —

柳生 大輔 石原 直久 長野 由知 池野 範男  
棚橋 健治 木村 博一

### 1 はじめに

社会科は、平和的な社会の形成者としての資質を育成することが使命である。今日の社会はヒト・モノ・カネの移動が急激に進み、利害関係がより複雑に絡み合っている。また、高度情報化社会の進展で、メディアによって届けられる大量の情報の中で、本当にほしい情報を得ることが難しくなっている。そして、このような傾向はますます進展することが考えられる。社会科は、社会の変化に適応しそのような激流の中で平和的な社会を築くことができる人材を育成していかなければならない。より広い視野で科学的な事実認識ができるとともに、他者・多国との価値観の違いを前提にしながら対話し行動できる「人」としての資質が必要となるであろう。

21世紀を担う子どもたちのために育成したいこのような資質を「国際的な資質」とし、本研究主題を設定した。

### 2 「国際的な資質」とは

国際化社会においては、人々は国家に帰属しているという感覚よりも、地球市民的意識をもち始めている。今後ますます国際化が進むと、「国」レベルでは社会に対応できない。一人ひとりの価値観の違いを前提として、より開かれた認識形成をめざす必要がある。

このように考えると今後必要となる「国際的な資質」とは、「国家や民族、人種、宗教、文化などの違いを認め、人が人として存在するために、他者との関係を平和的に形成するために必要な人としての資質」ということができるのではないかと。

### 3 めざす子ども像

国際的な資質の育成を想定した時、思いこみや人のうわさ、プロパガンダなどに惑わされず、偏見にとら

われない公正な思考・判断力が必要である。また、直接体験から得た情報からのみに依拠して生活することが難しく、情報が氾濫する今日においては、自ら情報を取捨選択し活用する力も求められる。

そのため、以下のような子ども像を描いた。

- 事実を事実としてしっかりとらえる子ども
- 多面的・多角的に社会的事象をとらえる子ども
- 既知の事実を基に未知の事柄を推し量る子ども
- 自主的・論理的に判断し行動する子ども

### 4 育成すべき力

めざす子ども像を受けて、社会科で身につけるべき力を設定した。小学校第3学年～中学校第9学年の7年間で「主に育成する力」を設定し、計画的・系統的に育成していく。

#### ○ 観察力

小学校第3学年・第4学年において重点的に育成を図る。科学的・論理的に社会的事象をとらえる力である。目の前にある社会的事象がどのような状態であるのかありのままの姿を把握し、分析することができる必要がある。他者とかかわりながら社会参画をめざすとき、事実認識が共通していることは前提条件となる。

#### ○ 批判力・推理力

小学校第5学年～中学校第8学年において重点的に育成を図る。「批判力」とは、目の前にある社会的事象を科学的に検討し、評価・判定をする力である。また、「推理力」とは、既知の事実を基に、事実間の関係性や今後の動向など、未知の事柄を推し量る力である。そのためには、複数の資料を比較検討することが必要であり、それが多面的・多角的に社会事象を考察することにつながる。

#### ○ 社会的判断力

最終学年である中学校第9学年で力点において育成

を図る。社会的判断力とは、観察力や批判力・推理力を基礎に社会のあり方を考え、社会問題について自主的・合理的に考える力である。実社会においては、異なる価値に基づく多様な考えの中で、自分の考えや立場を意識したうえで社会的な要素を考慮し、実行可能な選択肢を吟味し行動する力が必要である。

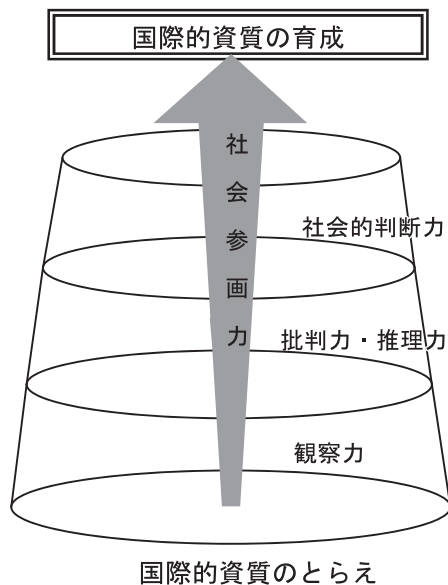
## 5 社会参画力の育成

### 5.1 社会参画力について

社会科で身につけた力を、実社会で生きてはたらく力に高める力であり、学び取った知識や理論を駆使し、よりよい社会を形成していこうと進んで社会に参画していく力である。ここでは、広く、共通の目的や問題解決に向けて他者とかわりながら、習得した知識や技能を活かし、問題の解決を行う力も含めている。

### 5.2 社会参画力育成の方法

社会参画力は身につけた観察力、批判力・推理力、社会的判断力を活用する力であるため、特定の学年で重点的に育成するというよりも、小学校第3学年から中学校第3学年までを視野に入れて育成をめざす。特に小学校第5学年生以上が行う選択社会科においては、社会参画力を特化して育成することとした。



#### ○ 必修社会科

必修社会科においては、共通の目的や問題解決に向けて他者とかわりながら習得した知識や技能を生かし、問題の解決を図ることに力点をおいた。

#### ○ 選択社会科

選択社会科では、社会科学習や社会的事象について強い興味をもつ子どもが集まって学習を展開することから、既習の知識や技能を活用しながら新しい文化を創出し社会に参画することに力点をおいた。必修教科

で学習したことを基にして、未来の社会の成員として直面するであろう問題といった発展的な課題を扱う。

### 選択社会科のテーマ

学年	テーマ
5・6年生	「エコ&クリーンプロジェクト 神門市2009」
8年生	「地理作品をつくってみよう」 「文献読解からみる社会」 「現代社会にもの申す」
9年生	「裁判員制度を知ろう」 「オリジナルマップを作ろう！」 「株式の購入を通して企業について知ろう」

## 6 必修社会科実践事例 小学校第4学年

### 6.1 単元名

- 「どうするイチクミ帆布工房!？」

### 6.2 単元について

地域の地場産業と地理的・社会的条件との関係や自分たちの生活との結びつきを理解することがねらいである。尾道の帆布工業は北前船の往来とともに起こり、戦争中の軍需拡大によって大きく成長するが、化学繊維の台頭により衰退し、現在では向島に一社を残すのみとなっている。このように社会の変化に大きく左右された帆布工業は、現在では観光客が多く訪れるという地理的条件を生かしながら生き残りが図られている。

産業衰勢の背後にある社会条件を捉え現代社会のあり様を意識しながら生き残り策を考える中で、事象相互の関係を意識し、自己もその関係の中に位置づいていることに気づくことができると考えた。

### 6.3 単元の目標

- 県内の地場産業や自分の生活との結びつきを調べようとするができるようにする。
- 帆布工業や帆布製品生産と地理的・社会的条件を関連づけて考えることができるようにする。
- 帆布工業や帆布製品生産について資料を活用して課題追求をすることができるようにする。
- 帆布工業やその他の県内の地場産業が外国と結びつきがあることを理解できるようにする。
- アイデアを出し合い既習内容を関連づけて課題解決のために考え、社会に位置づく自己に気づくことができるようにする。

### 6.4 単元計画 (全11時間)

- 第1次 広島県の地場産業を調べよう……………2時間
- 第2次 尾道帆布工業と帆布製品づくり……………6時間

第3次 どうする!?イチクミ帆布工房……………3時間

## 6.5 授業の実際

第3次では、既習内容を活用し社会的条件を意識しながら社会を見つめ直すことができるように、学級を「イチクミ帆布工房」に見立て、商品アイデアを生産者に提案する活動を仕組んだ。帆布の特長を生かしながら、現代社会に合った、付加価値があって市場性がある商品案をめざした。生産者をゲストティーチャーとして招聘し、子どもたちのアイデアの商品化にあたって考慮が必要な点について指摘してもらった。

子どもたちは一次案として以下のものを提案した。

めがねフレーム・ふるしき・機械や楽器のカバー・  
なべつかみ・カーテン

生産者からは帆布のもつ希少性やストーリー性といった付加価値の面で課題があると指摘を受けた。

そこで、生産者に、備後地区の他の地場産業とのコラボ商品を紹介してもらい、付加価値が高まり、販路拡大をはかることができるような商品をめざして再度アイデアを練り直した。

二次案としては以下のようなものがあげられた。

畳の帆布のマット（備後表と）・行灯（宮島細工と）・  
ブーツカバー（府中のはきものと）・靴の中敷（府  
中のはきものと）・ソファ（府中家具と）

これらの案に対して生産者側からは、単に組み合わせれば付加価値や市場性が生まれるというものではないという指摘を受けた。

## 6.6 考察

子どもたちのアイデアは、実際に商品化するには難しいものが多いが、様々な条件を考慮しながらアイデアを考えていることはうかがえる。生産者側に身をおき商品提案をすることで、尾道や備後の地理的条件や、現代社会の社会的条件を意識することができているといえよう。子どもたちが生産者に宛てた手紙には、生産者の工夫や努力の深さに気づき、複雑な社会の中で生産活動を行う難しさに触れた記述が多く見られた。

帆布の性質を生かして、しかもコラボして1+1が2以上になるように付加価値がでるようにするのはすごくむずかしいです。たぶん〇〇さんはいろんな企画をたてて失敗をたくさんしてでもがんばっているのだらうと思います。新しいアイデアが思いついたらまた聞いてください。

〇〇さんと勉強をして答えは一つではないということが分かりました。とてもいい商品ができたと思っても、世の中そんなに甘くなくて、必ず利益につながるわけではないということに気づきました。

「世の中そんなに甘くない」という表現は、社会の中で自己を意識している姿の一つであるといえよう。

また、むずかしさを感じた上でさらに新しいアイデアを考えようとする姿からは、工夫や努力を重ねる生産者へのあこがれや社会参加への意欲が伝わってくる。

反省としては、今回扱った社会的条件の整理が不十分であったことがあげられる。どのような社会的条件のつながりを意識させるのか、そうさせるために効果的な方法はどのようなものなのか、検討を重ねたい。

## 7 必修社会科実践事例 中学校第7学年

### 7.1 単元名

○ 「日本の領域について考える」

### 7.2 単元について

現在日本は、ロシアとの間で北方領土の問題、中国や台湾との間で尖閣諸島の問題、韓国との間で竹島をめぐる領土問題といくつかの領土問題を抱えている。また、日本の最南端の島である沖ノ鳥島が岩であると主張する国もある。

これらの領土問題に関する国民の知識は乏しく、解決策を考える意識も高いとは言えない。これは生徒にも同じことがいえる。領土問題について、日本と相手国の交渉過程を見る限り早急な解決は見込めないが、当事国の国民として平和的な解決策を模索していく態度を養うことは重要なことである。そのために、事実を理解し、その事実を活用し、意見交流を行うなど探究過程を経て、思考の再構成を繰り返し、自らの意見を構築していくことは有効な学習であり、地理的な見方や考え方の基礎を養うことにもつながる。

日本の位置を様々な視点から認識し、国家の三要素をふまえて日本の領域ならびに経済水域についての理解を深め、領土問題に積極的にかかわっていかうとする態度を育てるために、特に文化的・経済的交流が盛んに行われ、歴史的なつながりも深い隣国韓国との間で生じている竹島問題についての解決策を考えていく。平和的解決策を多面的・多角的に考えていくことは、両国の将来のためにも必要なことであり、また社会科における思考力の育成にもつながる題材として価値あるものであろう。

### 7.3 単元の目標

- 地球儀や世界地図を活用して、世界から見た日本の位置関係の特色を、多面的・多角的に考察することができるようにする。
- 都道府県の位置や名称、8地方区分の仕方について理解することができるようにする。
- 日本の領域を理解し、経済水域の範囲とそのもつ意味について考えることができるようにする。

- 北方領土問題や竹島問題について概要を理解し、相手国の主張も理解した上で、今後の解決に向けて自分の考えをもつことができるようにする。
- 班で意見交流することで多様な考えに触れ、思考の再構成を行い、自分の考えをまとめることができるようにする。

#### 7.4 単元計画 (全9時間)

- 第1次 日本の位置を調べよう…………… 1時間
- 第2次 都道府県って何だろう…………… 2時間
- 第3次 日本の領域…………… 6時間

#### 7.5 授業の実際 (第3次)

##### (1) 課題追究

国家の三要素、排他的経済水域など基本的事項について学習した後、日本の排他的経済水域を含めた領域面積を他国と比較した。日本の領土面積で他国と比較したときに比べ、その大きさ(世界第6位)に生徒達は驚きを示した。その後、沖ノ鳥島について位置、現状を映像も利用しながら理解させた。その上で日本の主張、中国の主張について資料を基にどちらの主張に説得力があるのか、個人・小集団(班)の順で考えた。生徒の多くは、国連海洋法条約の内容から島なのか、岩なのか判断に迷っていた。排他的経済水域を設定する意義も含め、より説得力のある意見構築に向けて話し合いを重ねた。

次に、北方領土問題についても位置、現状を確認後、日本とロシアの主張について理解に努めた。その際、授業時間との関係で資料の読解を家庭学習で行わせた。北方領土問題について理解を深めるためには、日ソ間の歴史もふまえないといけないが、本単元ではその概略をつかませるにとどめた。

沖ノ鳥島と北方領土で行った学習過程を、竹島問題についても行った。それまでの学習過程が典型となり、生徒たちもスムーズに学習に取り組むことができた。竹島問題の平和的な解決に向けて、事前に必要な学習事項として、位置、現状に加えて、日韓の歴史、貿易、水産業、文化交流、教育、世論などについて、資料を使って読み取れたことをまとめて、班で交流した。その内容もふまえて日本と韓国のそれぞれの主張を基に、生徒たちが社会に出て活躍するであろう20年後の理想的な日韓関係の姿を個人・班で考えていった。最初に班で考えた意見については、教室に掲示し他の人に見てもらい疑問点や意見などメッセージを付箋紙に書いてもらった。それらを班で分類し、自分たちの意見をさらに具体的な意見構築につなげていく作業を行った。その際、感情論だけの意見に終わるのではなく、理由をともなった意見を作るように促した。

2度目の意見を文章にまとめ、今度はより客観的な

意見をもらうために、広島大学に留学している韓国人留学生に見てもらいコメントをもらった。このコメントは最終的な提案文作成にも生かしていった。生徒たちの学習する姿から、班での交流や他者の視点を取り入れながら進める学習は、興味・関心を持続させ、内容の理解を深めるために有効であると考えている。

##### (2) 提案文作成に向けて

20年後の理想的な日韓関係を築くために、班で提案文を作成することにした。今まで学習してきた内容をふまえて、現時点でどのようなことが有効にはたっているのか、何が足りないのか、など現状分析を行った。この足りない所を具体的に考えていくことが理想的な日韓関係を築くことにつながるものと考えている。各班で作られた提案文は最終的に韓国人留学生に見てもらい、韓国人の立場からの意見をもらうことで終了した。

#### 7.6 考察

学習前に行ったアンケートでは、日本がロシア・韓国・中国との間で抱える問題として領土問題をあげた生徒は20%にも満たない状況であった。具体的に、「竹島問題」と答えた生徒はさらに低い割合であった。

授業を進めていく中で、思考を深めるためのポイントを2つあげたい。第一に、お互いの国の立場を理解する時に、なぜそれぞれの国はそのような意見をもったのかという理由をていねいに考えさせることが必要である。この部分は、歴史的分野の学習内容と重なるので、分かりやすい資料を基に進めなければならない。

第二に、他者との意見交流の必要性である。他者の考えに触れることは自分の考えを再構築する上で良い動機付けとなる。今回は韓国人(たぶん20年後に両国の関係を構築する立場にある世代)の日本に対する厳しい意見に触れることにより、班で話し合う時に、どうすればよりよい解決ができるのか立ち往生する場面が生じた。この立ち往生を通して、将来市民として活躍することになる社会とはどのようなものなのか、その社会で生きていくことの厳しさを感じとったのではないだろうか。国家間で話し合うことの大切さと難しさの両方を体験することで、国際的資質の育成につながり、そのことは地理的な見方や考え方の基礎を養い、社会科における思考力の育成にもつながるものと考えている。

学習後に行ったアンケートでは生徒の96%が、日本の抱える領土問題について理解が深まったと回答している。本単元の学習内容は、地理的分野での実施であったが、今後授業で扱う歴史的分野や公民的分野での学習にもつながるものと考えている。授業時期については、様々な意見があると思うが、その妥当性について実践を通して今後検討していきたい。

〈学習後に行った記述より〉一部抜粋

- ・今回学習して、改めて解決不十分の問題が数多くあることに気づかされました。しかも単純にお互いが話し合っ解決できるようなことではないという現実も思い知らされました。私たちが問題の解決案をいろいろ考えましたが、考えれば考えるほど複雑だなということを実感しました。早く問題が解決されるのが一番です。でもそのためには関係者だけではなく、国民全員で考えなければいけないと思います。
- ・私はなぜゆずり合わないのだろうと思っていました。でもそれは最初のころだけで、鳥を手に入れるとどんなメリットがあるのか、手に入るとどのようなことができるのか、いろいろな考えが詰まっているのだと分かりました。国の代表は、国の損得にかかわることを大事に話し合っていると思います。ニュースで流れても、今まで軽く受け流していたけれど、これからはどうなるのかニュースや新聞から読み取って、自分なりに考えてみたいです。
- ・私は沖ノ鳥島、北方領土、竹島問題の学習を通して、どれも友好関係を大切にしてほしいと思いました。特に何回も班で話し合った竹島問題。20年後私たちが考えた理想像がそのままが実現してほしいと思います。
- ・領土の大切さをとても実感しました。なぜここまでお互いにゆずらないのか考えると、やはりそこには国を守ろうとか、国の為にとという考えがあることが分かりました。領土問題は、きちんと正面から立ち向かわないといけないと思います。

## 8 選択社会科実践事例 小学校第5・6学年

### 8.1 単元名

- 「わたしも三原の主人公 ―エコ&クリーンプロジェクト神明市2009―」

### 8.2 単元について

附属三原小学校前の道路を中心に行われる「神明市」は、数百の露天商が軒を連ね昨年度は約30万の人出で賑わった。しかし毎年割り箸や串、ビニル袋など大量のごみがでており主催者や市役所、市民、子どもたちにとって大きな問題となっている。このごみ問題の背景を探り、自分たちにできる解決方法を考え実行することを通して、ごみ問題には様々な人々や組織がかかわっていることを理解するとともに、問題解決には多くの人々の理解と協力が必要であることを実感できる。また、郷土三原について自らかかわる良さを感じることができる。

### 8.3 単元の目標

- 神明市のごみ問題の解決方法を考えることを通して、郷土三原をもっと住みやすく美しい街にするための方法を考え、行動することができるようにする。
- 一般家庭などから出るごみと神明市で出るごみとでは、回収・処分の方法や主体・責任や費用拠出者が異なることを知り、神明市のごみ問題の特殊性を

理解することができるようにする。

- 神明市のごみ問題を解決するために、神明市にかかわっている様々な機関や人たちと連携をとり利害を調整しながら、お互いが理解し合い協力して取り組める方法を考えることができるようにする。
- 神明市のごみ問題について来場者数やごみの量、現在の処分方法、処分費用など、様々な情報を基に、総合的にとらえることができるようにする。
- ごみ問題を解決するために「今、自分たちにできる最善の方法」で、仲間や関係する多くの方々と共に取り組むことができるようにする。
- 市中心部の現状について興味・関心を持ち、私たちの三原をよりよい街にするために、自分にできることを考え、意欲的に活動しようとする。

### 8.4 単元計画（全7時間）

- 第1次 ガイダンス……………1時間
- 第2次 神明市ごみ問題について考えよう……1時間
- 第3次 エコ&クリーンプロジェクト神明市2009の画を立てよう……………11時間
- 第4次 エコ&クリーンプロジェクト神明市2009を実施しよう……………課外（神明市）
- 第5次 活動を振り返ろう……………3時間

### 8.5 授業の実際

子どもたちが、様々な情報を基に社会事象を深くとらえることができるように、子どもたちや学習の状況を基に、適宜適切な情報を提示していった。

- 神明市の時と、神明市が終わった後のごみの様子の写真を提示する

子どもたちは4年生時の必修社会科で、神明市において投棄された多くのごみを拾う活動をしたことを思い出しながら、「ごみのポイ捨てをなくしたい。」と強い思いをもった。また、昨年度も選択社会科で学んでいた6年生より、「昨年度もぼくたちは、神明市のごみ問題を解決したいと思っていた。」という意見も出されて、自分たちの手でどうにか、ごみのないきれいな神明市にしたいという思いをもった。

- 日本たばこ産業株式会社の方に自分たちの計画に意見をもらう

単元当初子どもたちは、ごみ問題を解決する方法について、「ごみ袋を配り、来た人にごみを持ち帰ってもらう。」「ぼくたちが祭りの期間中ごみ拾いをして、その姿でごみ問題をみんなに訴える。」など、人の心情に訴える方法しか考えられていなかった。

そこで、「ひろえば街が好きになる」というごみ回収活動を行っている日本たばこ産業株式会社の方々に自分たちの考えを伝え、次のような意見を頂いた。

### 附属三原小学校選択社会科の皆さんへ

- ・祭りなどの雑踏のなかでは、安全を常に考えて活動することが大切。
- ・ごみ袋を提供してもよいが、ごみがたくさん詰まったJ Tのごみ袋が街中に散乱するのは困る。
- ・ごみが集まれば集まるほどきれいになるが、処分が大変。集めたごみの処分をどうするのか関係機関と相談した方がよい。

子どもたちは、これらの意見を基に、

- ・三原市や警察署、神明市協賛会など神明市に関係する方々に相談する。
- ・資金や必要な物など、もっと具体的に考える。

など、自分たちの計画案を見つめ直し、神明市に関係する方々に意見を頂きながら計画案を修正していった。

#### ○ 模擬演習を行い、計画案の課題点などを探る

様々な方々からの「安全にごみ拾いができるのか」という意見を基に、実際に人通りが多い三原駅前でごみ拾いを行う模擬演習を行った。

子どもたちは駅員さん、通行人から、「ありがとう。」「すごいねえ。私もごみを捨てないようにするね。」と声をかけられ、自分たちの活動に自信をもつようになった。

しかし、「ごみを拾うことに夢中になって、

通行している人とぶつかりそうになった。」ことを基に、「ごみ拾い」については、再度検討することにした。

#### ○ 市役所の商工振興課の方と神明市協賛会の方々に計画案について意見を頂く

商工振興課の方と神明市協賛会の方をゲストティーチャーとして招き、計画案に対して意見を頂いた。協賛会の方から、資料「平成20年神明市人出概数」や神明市当日の様子などについて説明していただいた。商工振興課の方からは、「実際にお祭りのごみを回収している『やっさ祭りゴミ減らしたいエコレンジャー』（三原商工会議所）の代表者に話を聞いてみてはどうか？」などの意見を頂いた。

これを基に、子どもたちは再度計画案を見直し、より安全で、効果的なごみ問題解決の方法を考えること

ができた。

### 8.6 考察

子どもたちは、神明市協賛会や市役所など神明市に関係する方々と資料を基に話し合うことを通して、ごみ問題には様々な要因が複雑に絡み合っていることを知ることができた。さらに、ごみ問題を解決するためには神明市に関係する多くの方々と協力していく必要があることも考えることができた。また、警察や市役所の方々が自分たちの安全確保のために様々な方策を考えてくださっていることに気づき、身の回りの大人に支えられて生活できていることも知ることができた。

しかし、まだ、「正しいことを行えば、みんな理解してくれて協力してくれる。」という思いが強く、社会の諸問題の複雑さについてはとらえられていない。

### 9 おわりに

国際的資質の育成をめざして、資料提示を工夫したり、社会参画を意識させながら考えの異なる他者と接する場を仕組んだりすることは、子どもたちの学習意欲を喚起し、社会を知る、社会を分かるために有効であった。しかし、分かった社会の中で、自分がどのように位置づいているのか、どのようにかかわっていくべきであるのかということにまで意識を向けさせることは不十分であった。自らを社会に位置づけながら社会に参画することができるような学習展開の工夫や手立てを明らかにする事を今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 1) 柳生大輔, 村上忠君, 石原直久, 池野範男, 棚橋健治, 木村博一「国際的資質を育成する社会科学習(1)」, 広島大学学部・附属共同研究紀要, 第34号, 2006
- 2) 柳生大輔, 石原直久, 徳本光哉, 池野範男, 棚橋健治, 木村博一「国際的資質を育成する社会科学習(2)」, 広島大学学部・附属共同研究紀要, 第35号, 2007
- 3) 柳生大輔, 石原直久, 徳本光哉, 池野範男, 棚橋健治, 木村博一「国際的資質を育成する社会科学習(3)」, 広島大学学部・附属共同研究紀要, 第36号, 2008
- 4) 広島大学附属三原学園 [編著]『21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発』, 明治図書, 2005
- 5) 広島大学附属三原学園 [編著]『21世紀型教育への提言～幼小中一貫で育つ子どもたち～』, 溪水社, 2008

